2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**地域資源としての古民家の再生に影響を及ぼす要素の考察―山形県庄内地域を対象として―**
キーワード	①古民家の再生、②影響要素、③山形県庄内地域

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	チョウ　コウ 張　紅
配付時の所属先・職位等 （令和 7 年 4 月 1 日現在）	東北公益文科大学　公益学部　助教
現在の所属先・職位等	同上
プロフィール	2022 年 9 月に筑波大学生命環境科学研究科博士後期課程を修了し、博士（理学）の学位を取得。その後、同大学の博士特別研究員を経て、翌年の 2023 年 4 月より現職。専攻は地理学で、主に歴史的建築物の保全について調査研究している。

1. 研究の概要

本研究は地理学的アプローチから、山形県庄内地域を対象に、点在する古民家の保全に影響を及ぼす要素を明らかにしたものである。具体的には、13 軒ほどの古民家の所有者を対象に聞取り調査を実施し、所有者の建築物に対する意思決定のプロセスを明らかにすることで、地域全体に通底する「再生か否か」を分かつ要素を考察した。本研究の特色は、面ではなく「点」として存在する古民家に着目した点、そして所有者の意思決定プロセスを世代交代に伴う変化として動態的に分析した点にある。

2. 研究の動機、目的

日本における歴史的建築物の保全は、代表的な保全制度としては、重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）や重要文化的景観などが挙げられる。しかし、これらの制度は主に線的または面的に形成している街並みを優先して保全している。前者でその分布を見ると、特に中部地方や関西地方に集中しており、東北地方は比較的少ない状況である。特に山形県には、重伝建地区が 1 つも存在していない。

このような影響力の強い法制度による保全の視点から見ると、山形県のような地域は歴史的街並みのイメージが弱いように見える。それは、地域住民や観光客に対して、マイナスな地域イメージを与えてしまう。しかし、こうした国によるお墨付きがなければ、それは古民家として多く存在している。

近年、古民家が日本の文化を象徴する重要な観光資源として見直されつつある。また、古民家に魅了され地方に移住する人々も現れている。空き家が増加する中で、古民家を積極的に利活用することが有効な対策として注目されている。さらに、循環型社会が提唱され、新築よりも既存の資源を活用することが推奨されている。

これらの点から、特に歴史的街並みのイメージが弱い地域において、歴史的建築物（古民家）の存在を究明し、それはどのように保全され、活用され、地域にどのような役割を果たしているのかを明らかにする必要がある。そこで、本研究では、古民家を有する地域を対象とし、所有者の意思決定の過程を時系列的に分析することで、古民家の保全と利活用に影響を与える

要素とそれらの結びつきを明らかにすることを目的とする。また、古民家が地域資源として果たす役割も探求する。

3. 研究の結果

本研究では、一般社団法人全国古民家再生協会による古民家の定義を採用した。同協会では、古民家を「1950 年の建築基準法制定以前に建てられた伝統的建造物の住宅」と定義しており、2026 年現在では築 76 年以上の建築物に相当する。

調査対象の選定にあたっては、まず Google マップを用いて庄内地域を対象に「古民家」をキーワードとして検索し、候補となる施設のリストを作成した。その後、Google 検索を通じて各施設について古民家として紹介されているかを確認し、さらに電話や現地訪問の際に建築年代を確認することで対象を絞り込んだ。その結果、13 軒の古民家を調査対象として選定した。調査方法としては、各事例を訪問し、運営者への聞取り調査を実施した。



図 1　代表的な研究対象の 1 つ
そば屋・生石大松屋
（2026 年 3 月著者撮影）



図 2　図 1 の古民家の中の様子
（2026 年 3 月著者撮影）

調査の結果、対象となった古民家のうち、茅葺き屋根を維持していたものは 3 軒のみであり、同じく 1 軒は茅葺き屋根の上をトタンで覆う形で保存されていた（図 1、図 2）。その他の事例については、すべてトタンによる被覆が確認された。

活用形態については、4 軒が保存制度、特に地域の保存条例によって保全され、文化施設として一般公開されており、それ以外の事例は飲食店などの店舗経営を目的として活用されている。多くは所有者や運営者個人の努力によって維持・管理されている。

近年の古民家ブームを背景として、多くの事例ではそば屋やカフェなどへの転用が行われていた。しかし、聞取り調査からは、単なる経済的理由だけではなく、「古民家が好きだから」といった思いを持つ運営者が多いことが明らかとなった。

以上より、庄内地域では制度的保護を受ける古民家は限られているものの、個人の熱意と主体的な取組みによって古民家の保存・活用が支えられている実態が確認された。

4. 研究者としてのこれからの展望

私は、歴史的建築物や古民家の保存・活用に関する研究を通じて、人と地域、文化をつなぐ研究者になることを目指しています。そのために、研究の過程で直面する課題を一つひとつ乗り越え、自らの研究に自信と責任を持ちながら成長していきたいと思います。

今後は日本や中国にとどまらず、アジアやヨーロッパなど世界各地を訪れ、歴史的建築物の保存・活用に関する実地調査と比較研究を進めたいと思っています。また、近年急速に発展している AI 技術を研究に取り入れ、歴史的建築物に関する独自のデータベースの構築にも挑戦したいと考えております。従来の質的研究に加え、定量的な分析手法も習得し、より多角的な視点から研究を発展させていきたいと考えています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは、研究助成という形で温かいご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

数多くの優れた研究テーマがある中で、本研究を採択していただいたことは、私にとって大きな励みとなりました。研究者としての道を歩み続ける自信を与えていただき、深く感謝して

おります。

本研究では、庄内地域における古民家活用の実態について調査を行いました。調査を通じて、私は庄内地域に対する新たな認識を得ることができました。庄内には歴史的建築物が集中的に保存されている地区は多くありませんが、その一方で、古民家や地域の歴史的景観を大切にし、その価値を次世代へ伝えようと努力している方々が数多く存在します。そうした方々の活動や熱意は、研究者だけでなく、地域住民や観光客を含めた多くの人々に知っていただく価値のあるものだと感じています。また、本研究を通じて、多くの方々との出会いに恵まれ、地域に根ざした実践や思いに直接触れることができました。これは研究成果だけでなく、私自身の成長にとっても大変貴重な経験となりました。

現地調査は一区切りを迎えましたが、今後は研究成果を学会において発表するとともに、地理学分野の学術雑誌への投稿を目指しております。今回得られた知見を広く社会へ発信し、歴史的建築物の保存と活用に関する理解の深化に少しでも貢献できるよう、引き続き研究に取り組んでまいります。

最後になりますが、本研究を支えてくださった寄付者の皆様に改めて心より感謝申し上げます。皆様からいただいたご支援を糧に、今後も研究活動に真摯に取り組んでまいります。